

CH M4.00

* SHISEI SHIKA SHU, Vol. 1, 1942
(by [Satoru?], Tsuneishe)

21/101
C

67/14

67/14

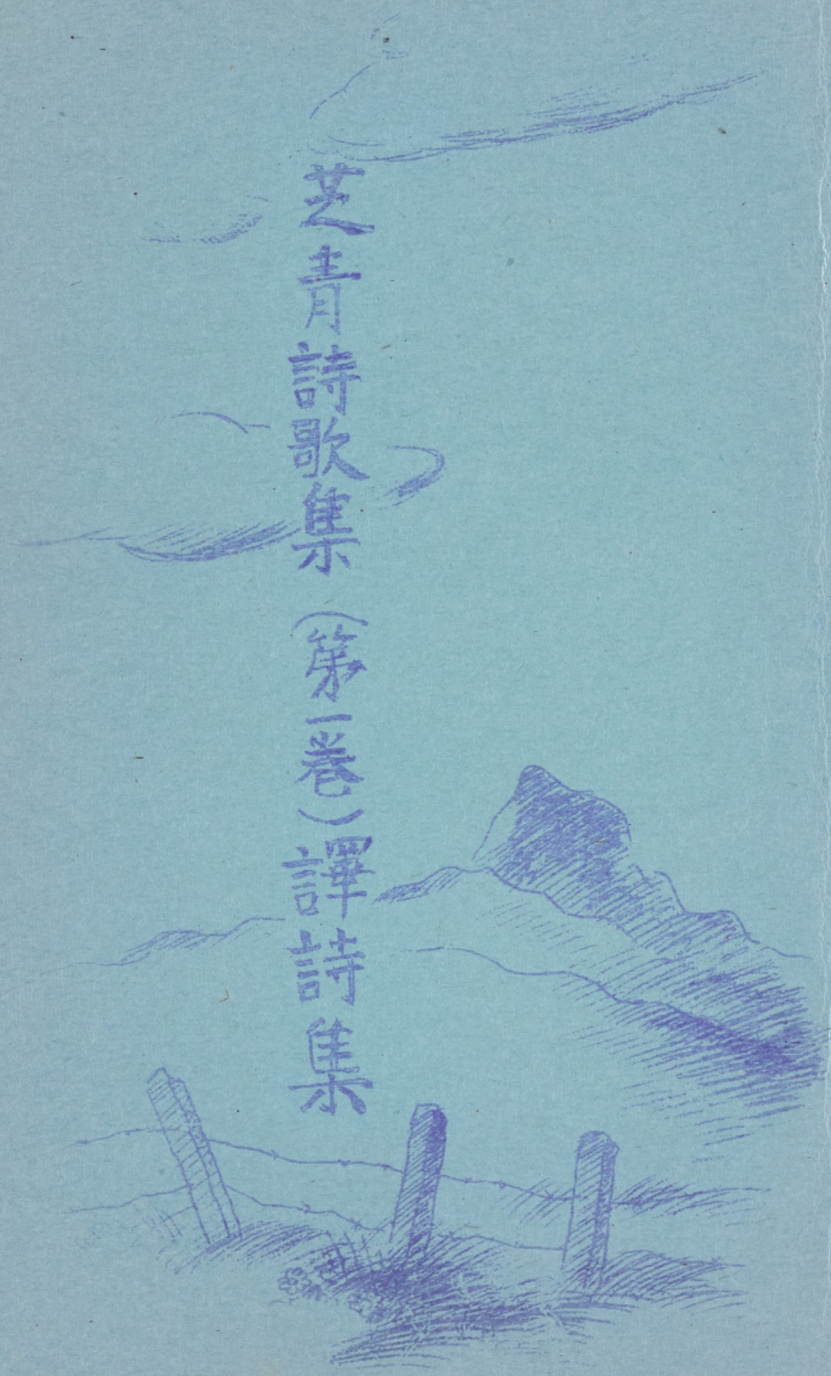
C

Volume 1, 1942
Shisei Shika Shu
by [Satoru?], Tsuneishe
(1942) 101 pages

000

竺青詩歌集

芝青詩歌集
(第一卷)譯詩集



Friendship

by Eugene Dimon

Really no matter the wind, the swirl
Of the frenzied dusts that run;
No matter the shadeless trees, the beat
Of the unrelenting sun;
No matter a thing, not even lives
Spilt end-o'er-tilly-end;
We still can live, and count the day,
If we can make one friend.

Pomona Assembly Center, California,

1942

友情 エージンダイモン

風塵を捲きて
馳せ過ぐるとも何かある、
用捨なき日の直射をうくる
蔭なき樹とて何かある、
たとひ生命が滅茶苦茶に
こぼさるゝとも何かある、
我等日毎を喜び生き得、
一人の友を贏ち得なば。

加州ボモナ集会所

一九四二

はしがき

少年の頃から詩に趣味を持つて居た私は、先輩のものを讀んだり、時折り自分でも作つたりして居たのでありが、長き私の在米生活の状態が私の憧憬を満たして呉れる様なものではなかつた爲め、俳句に依つて僅かに自ら慰めて來たのであつた。計らずも日米干戈を交へる事となり、幸か不幸か、抑留生活を余儀なくせらるゝ事となつたので、此の期間を善用する意味に於て英詩鑑読並びに作詩に聊か努力しつゝある次第である。

今回は私の最初の試みでもあり、且つ騰寫版に依るのであるから充分な事は出来ないのであるが、こうした小冊子を今後も繼續して出す考へである。

第一卷は御覽の通りのものであるが、第二卷には、クリゲの代表作『老翁集の歌』の全訳に註解を加へたものを出し、第三卷は『テニソン詩集』を出す計劃である。

目次は作者の年代順に配列し、作者名及び詩題は原語をも併記し、且つ作者の生年と死亡の年を記したのは、原詩と對照して讀むに便利である爲めである。

尚ほ誤訳や推敲の余地のある箇所も多々ある事だと思ふ。諸賢の忌憚なき御指摘と御批判を仰ぐ次第である。

昭和二十年二月十一日

倭州ハース山收容所、雪深き窓にて

著者

芝青詩歌集(第一卷) 訳詩集

目次

作者不詳 (古民謡)

若いキヤンベルさん

ランダルの若様

ウイリアム シェキスピア

冬 (戀の無駄骨折り節)

短詩

ロバート ヘリツク

稚兒への恩寵

黄水仙

一 二 三 四 五 六

リッケヤード ラブレース

ルカスタに

アレキサンダー ポープ

閑寂

オリバー ゴールドスミス

歌

ヨハン W. フォン ゲットテ

童

ウイリアム ブレーキ

小羊

虎

蠅

無邪の占ム

ロバート バーンズ

七 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

トム、オ、シヤンター	一四
愛しい私の安藤ゲヨンさん	一四
ウ井リアム ウォーヅ ウォース	一五
雲のごと我独り彷徨ひて	一六
天に沖るやわが心	一七
雲雀に寄す	一八
現世は堪へ難きかな	二〇
トーマス モアー	二〇
夏の終りの花うばら	二〇
ウォルター スコット	二二
愛國心	二二
ロード バイロン	二二
セナテエリブ潰滅	二四
ギリシヤの嶋々	二四

パトシー シエレー	二九
雲雀に寄す	二九
ゲヨン キーツ	三〇
無慈悲姫	三〇
ハインリヒ ハイネ	三七
汝こそ花の姿かな	三七
ヘンリー W. ロングフェロー	三七
心せよ	三九
歌	三九
ダンテ G. ロセケ	三九
小曲	四一
作者不詳	四一
おとなどて人の心は高ぶ	四一
れる	四一

芝青詩歌集 (第二卷) 譯詩集

作者不詳

若いキャンベルさん 古民謡
Bonny George Campbell
Anonymous

岡越え原越え川越えて

若いキャンベルさん出かけた

お馬に鞍置き轡はめ

凛々しい姿で出かけたが、

キャンベルさんは帰らずに

お馬が裸で戻った。

嫁御は髪を掻きむしり、

お母ら泣き泣き走り出た、

白のものはまだ青く、

黍も揚がねばならぬし

納屋も造作せにやならず

お嬰兒もやつて生まれる、

お馬に鞍置き轡はめ

長靴穿いて烏毛もし、

剣も横たへ出かけたが、

キランベルさんは歸らずに
お鞍は血だらけで
お馬がじよつくり戻つた。

ランダルの若様 古民謡
Lord Randall Anonymous

「あゝどこへ行つてた、ラン
ダルお前は、
あゝどこへ行つてた、血氣
の若者？
「森へ行つてた、早よ寝せて
おくれ、
2 狩で疲れて睡いよお母さん、

「どこでお昼食も食べたのラン
ダル、
どこで食べたの血氣の若者？
「あの娘の所よ、早よ寝せてお
くれ、
狩で疲れて睡いよお母さん、
「何を食べたの、ランダルお前
は、
何を食べたの、血氣の若者？
「煮鰻食べたよ、早よ寝せてお
くれ、
狩で疲れて睡いよお母さん、

“持犬どうした、ランゲルお
前は、

犬はどうした、血氣な若者。
“お、ありや膨れて死んだ
よお母さん。

狩で瘦れた、早く寝せてお
くれ。”

“毒害されたな、ランゲルお
前は、

毒害された乃、血氣な若者。
“あ、毒食はされましたよ
お母さん。

3 胸が苦しい、早く寝せてお

くれ。

ウィリアム セイクスピア

William Shakespeare (一五六四—一六一六)

冬 (戀の無駄骨折リ一節)

Winter (from Love's Labour's Lost)

塚に米柱がぶら下がり、

ゲツクは指に息をかけ、

トムは客間に薪運び、

牛乳が氷つて戻ると、

血は楓らるゝ汚れ道、

夜な夜な鳥が円い眼で

ツーフー

ツ・イ・ツ 唄ふころ
グ・ア・ンは鍋を掻きまぜる。

風がごうく吹きすすみ
咳で説教も聞えなく
小鳥は雪にうづくまり
マリアンの鼻赫はてり
冬り林檎は鉢で泣き
夜な夜な鼻が円い眼で
ツ・イ・ツ

ツ・イ・ツ 唄ふころ
グ・ア・ンは鍋を掻きまぜる。

4 註、冬った野林檎(うづ)を酒の

鉢に入れると奮氣を失ふと
いふ

短詩 (ソネット) 第三十九
sonnet

我幸運と人の眼に恥かしめられ
見棄てられたる惨めさに独り
歎かひ
耳なき天を益もなく泣き煩は
し

われを顧み運命の拙きを呪ひ
希望に富める人のごと良き友
あまた

持ちて、装ひ彼のごとあらむ

わがいと欲^ほりし、
賞^ちづるもの一つ無
彼^{かれ}の技^{わざ}此^この力^{ちから}量^{りか}をひたすら
望^{のぞ}み、
我^{われ}とわが身^みを蔑^あ視^しめるか、
る時^{とき}しも、
たま／＼君^{きみ}を思^{おも}はへばー我^{われ}
は忽^{たち}ち
いぶせき地^ちより天^{あめ}の扉^{かど}につ
と揚^ありつゝ
讃^{ほめ}歌^{うた}うたふ明^あけ方の雲^う雀^{すずめ}に
も似^につ、汝^なが
5 美^はし愛^{あい}の想^{おも}ひ出^では王^{わう}位^いをす

らも
賤^{せん}しとすなはち、かゝる富^{とみ}我^{われ}
に覺^{おぼ}らす。

ロバート ヘリック

Robert Herrick

(一五九二—
一六七四)

稚^ち兒^にへの恩^{おん}寵^{ちやう}
Grace for a Child

稚^ち兒^にとなり我^{われ}立ち
雙^{ふた}の手^てを高く攀^{のぼ}ぐ、
よし蛙^かのごとく冷^{ひや}たくとも
大^{おほ}神^{かみ}に我^{われ}が手^て差^さしあぐ、
糧^かにまた我^{われ}等^らすべてに

み恵の豊かなれとぞ。

アーメン

黄水仙に
To Daffodils

美しい黄水仙よ、早る日の
正午に間あるに、汝があま

遠くへ行くに
堪へで涙のわもいづる。

待てしばし

急ぐやく日の

やがて落ち、

夕べの歌の時來なば

共々寄り、われらまた
携さへゆかん。

我等も東の間の生命、
われらの春も短かくて、
育てば萎ゆる速かに、

一切のごとく、ながごとく、

われら死す
汝が榮のごと、

また夏の

雨のごとくに乾くはつ、

なほ朝露の真珠たま

消えてあとなし。

リッチモンド リヴェース

Richard Lovelace

(一六一八)
(一六五八)

ルカスタに (戦場に臨むとて)
To Lucasta, going to the wars.

無情な
絶えきものといふなかれ
汝が 純潔さみ胸と優しさの
隠棲の戦場へ
大刀提走する我としも。

今追ひすがら人はこれ
戦場の仇人ぞ

また我がひとがひ抱くは

これ乎命と馬と槍。

かくも變りし我が姿
君も敬慕し給ふらん
名惜しむ心なかりせば
かく汝も戀し得たりけん。

アレキサンダー ポープ

Alexander Pope

(一六八六)
(一七四四)

閑寂
Solitude

親の譲りのそこばくの
田畑守りて安らけく、

故郷の地に生送る
ものぞ幸なる。

牝牛は牛乳を野はパンを
羊は衣の料あたへ
夏は涼影つくる樹を
冬は薪とし。

身は健やかに、平和なる
心のまゝに年月は
いつとは知らに流れゆく
幸なる生命。

夜は安眠し、ほどくに

文讀み想ひ、戯れつ
聖き想ひに耽る身は
罪なくめでた。

我もかく生き、幸に知れず、
嘆かれずして死なんかな。
奥津城どころ墓石だに
無きこそよけれ。

オリバー・ゴールドスミス
Oliver Goldsmith (一七三三—一七九四)

歌 (ウィークフィールドの司祭より)
Song. (Vicar of Wakefield)

花の乙女が過つて
男に裏切られしこと
氣付いた時はどうしましよ、
氣鬱と癒やす神呪^{マジック}や。
罪を淨める法あらかう？

罪を蔽ふ法一つ、
恥を人目に曝^{さら}さずに
あだし男に後悔の
胸を絞らせ、嘆かする
最後の法は——死ねること。

ヨハン・W. フォーゲーテ
Johann Wolfgang von Goethe (一七五九—一八三二)

萱

Das Veilchen

萱咲もけり牧場のほとり、
頂^{うへ}をたれて、人知れず。

いと麗はしの萱花。

若き牧婦は心も足も
いと軽やかに歩み來ね。
こふたへこなたへ歌ひつゝ。

萱思ふやう『あゝ我世にも
いと美しの花ならまほし、

あふだ暫しが程なりと。
み手に摘まれて、その優さ
胸に
ひしと絶りて暮ゆるまで、
あゝく哀の間なりとも。

あゝくもはれて女は来し
が

萱の花に目もくれず

あたら萱を踏み折りぬ。
倒れ死ねども花は嬉しげ。

君ゆゑ君の足もとに

よしや死ねとも我が手足
り。

ウヰリアム ブレーキ
William Blake

(一七五七
—二七—)

小羊
The Lamb

誰があなたを造つたの？

知つて居ますか小羊さん？

生命をあたへ川べりや
野べの草食ふ術教へ

いと柔かに輝いた

楽しお衣服を呉れた方、

また谷を音こぼす

優しい聲を呉れた方。

誰があなたを造ったの？

知ってゐますが小羊さん。

言つて上げよか小羊さん。

言つて上げよか小羊さん。

あなたと同じ名のお方。

自ら羊と呼んだ方。

柔和なやさしいお方なの。

あなた小羊、わたし稚児。

二人は聖名と同じ名。

幸あれがしな小羊さん。

幸あれがしな小羊さん。

虎

The Tiger

虎よ虎よ、闇夜の森に

燃え耀やける火の虎よ。

何神の手が、不死の眼が

汝が悲壯美を造りしぞ？

いづこの遠き空に、深みに、

汝が眼の焰燃えたりしや？

いかなる羽もて天駆けり

いかなる手火を握みしや？

如何なる肩が、妖術が

胸筋肉を擦り合はせしぞ？

汝が心臓の搏ちそめし時、

驚愕るべきかな、その手足。

如何なる錠、如何なる鎖、

どの爐に汝が頭脳はありし、

何たる鉄床、何たる把握が

その戦慄を起へしぞ？

素槍を星が投げ下し

涙に天を潤はせしとき、

彼は己れの業に笑みしや、

12 羊造る手、汝をもも遣らや？

虎よ虎よ、闇夜の森に

燃え輝ける火の虎よ、

何神の手が、不死の眼が

汝が悲壯美を造りしぞ？

蠅

The Fly

小さな蠅よ、

いましが夏の戯れを

心なき手の

拂ひ除けぬら。

汝がこと我も
蠅ならずや
汝もわがごとく
人ならずや。

われも踊り
飲みかつ唄ふ
盲目の手わが羽はねをも
拂ひ去るまで。

思想が生命
力と息ならは
無想もし

死なりせば。

われもまた
樂しき蠅ぞ
生くるとも
また死ぬるとも。

無邪の占る
Auguries of Innocence

一粒の砂に宇宙を視
野花に天國を見るものは、
その掌中に無邊際を
一瞬に永劫を握る。

ロバート・バーンス

Robert Burns

(一七五九
— 九六六)

トム・オ・シャンター (二節)
Tom o' Shanter

歡樂は罌粟の花^{はふじら}舞

手握れば早も散るなる。

また川に落つる淡雪

ほど白くとはに消ゆなる。

あらは又指さすひまに

去來する北の極光

14 かも消ゆる嵐の中の

夕虹と美しく夢なし。

愛しい私の安藤ダヨシさん
John Anderson, My Jo.

愛しい私の安藤ダヨシさん。

二人が始めて會つたとき

お前の髪は濡れ鳥

額もすべくして居たが

今ぢや禿たわ可愛しいダヨシ
さん。

お前の髪も雪のよだ。

だけど幸あれ。霜の頭に

愛しい私の安藤ダヨシさん。

愛しい私の安藤ダyonさん。

二人で岡へ攀ち登り

あの日この日を面白く

楽しく二人で暮したが、

ダyonさん、とげく手を取

りあつて

降りねばならぬ時が来た。

一所に麓で眠りましょ。

愛しい私の安藤ダyonさん。

ウヰリアム ウォーズワース

William Wordsworth

(一七五〇—一八五〇)

雲のごと我獨り彷徨ひて
I Wandered Lonely as a Cloud.

野に丘の上に浮く雲の
ごと我ひとり彷徨ひて。

湖水のほとり樹々の蔭、
打ちかたまりつゞよ風に

戯れ踊らんとむらの
喇叭水仙ふと見たり。

光り輝やき連なれり
銀河の星と一面に、

渚に浴ひてはてもなく、

線を描きて千萬の
花首ふりつ樂しげに
踊るを見たりものあたり。

波もかたへに躍れども
花の輝やまゝやまゝる。
樂しの友に詩人の
心も浮かであるべしや！
たゞ見守りぬその光景の
こよなき富に氣もつかず。

茫然とまた鬱々と
寢椅子にものを想ふとき、
16 さと目に浮ぶかのさまは

わが獨居の奇し恵み
かくて我が胸喜悅に
満ち水仙と躍らかなり。

天に冲るやわが心
My Heart leaps up whe I behold

天に冲るやわが心、
み空の虹を眺むれば、
幼なかりし日かくありき、
人となりたち今もなほ、
老ひたる後もかくれかし、
さなくば死なん。
稚兒は大人の父なるぞ。

自然を受へ敬しつゝ、
日ごと日ごとを我は送らん。

雲雀に寄す
To a skylark

吾と共に、共々に雲の中ま
で！

歌ゆゑに動き雲雀よ、
吾と共に、共々に雲の中ま
で！

汝がひとり雲もみ空も響が
へり、

17 汝がよしと思ふ所に到らま

で
われを引き揚げ導びまね。

荒涼の曠野より来りたる、
わがにけふ疲れたり、
魔法の翼いも持ちて
なれがべに飛ばましや。
ながその歌に
狂はしく聖も喜悦溢れたり。
空の饗宴の場高く、
高く吾を揚げ導びまね。

朝のごと喜びて、
なほ嘲笑かつ笑ひ、

愛つ者に、休息に堪もち。
慥に煩はされず、
酔へる雲雀よ定めし汝は
我が如き旅人たるを厭ふら
ん。

樂し、樂し生き物よ、
汝が靈は山川のごとくと勁
く、

全能の旋し主を讃歎す。
我等二人に喜びあれよ！

噫、わが旅路峻しく難く、
刺の沿地、埃の道の幾曲り。
さ、はれ汝らが歡喜みち

天の自由の歌聞げば、
己が運命をよしとして歩み
續けん、
高き欣喜望みつゝわが世終ふ
まで。

現世は堪へがたきかな
The World is too Much with US.

現世は堪へ難きかな、かにか
くに
あたら精力は取り遣りに皆浪
費され、
見得る自然の幾何が我等のも

のぞ!

物^{つぎ}卷^がに捧^たげ盡^はせし我^{われ}等^らかな。
日^ひ光^がに胸^{むね}あらはなる海^{うみ}原^{はら}も、
時^{とき}をわかたず極^{はげ}りつゝ、吹^ふき
過^すぎやがて、

静^{しず}かに睡^ねる花^{はな}のごと羽^{はね}收^ひむ
風^{かぜ}も、

ことごとくに調^{てう}子^し外^がれのうた
てきに

心^{こころ}の琴^{こと}に触^ふるゝなし。大^{おほ}神^{かみ}

よ、われ
朽^くちし異^い教^{きやう}の衣^えに、も包^くま
れまほし。

19 かくてこの樂^{がく}しも野^の辺^へに停^{とど}

みつ、

波^{なみ}がきわけてプロテウス出^でづ
るを見、また

ツライトン角^{かく}笛^{ふえ}吹^ふくを聞^きき、
得^えなば、

淋^{しみ}しき胸^{むね}のいばかり安^{やす}け
がらんを。

註　プロテウス・ツライトンは共に海^{うみ}神^{かみ}
の名なり。

トーマス モア

Thomas Moore

(一七五〇)

夏の終りの花うばら
Tis the Last Rose of Summer.

夏の終りの花うばら
咲き残りけりたゞ一つ、
麗はしの友いまはみな
あとなく凋み失せはてう
恥らひの色映しあひ、
香り香りに應ふべき、
うがらの花も絶へて、
さうびの蒼影もなし。

20 われいかでかはながひとり

莖に萎ゆるにまかせんや、
美しきもの皆眠りたり、
いましも共に眠れかし。
み園の友ら匂ひなく、
凋みて寝ねし床の上に
なが花片を散らすこそ
なかくにわが情なれ。
やがてよき友^は缺げゆきて
愛に輝やく^は團^は樂より、
くすしき珠の落ちんとき、
我もいましの後追はん。
心の友等萎へゆきて
愛づるものなま其のあとに、

あゝ誰がよく寝^さびはてし
世にしも独り住みぬべき。

ウォルター スコット
Walter Scott
(一七三二—一八三二)

愛國心
Patriotism

異土の濱^{さき}に放浪^{はうろう}ひき、
足を故郷に向けしとき、
誰か心の火と燃えて。

21 “これぞ我がもの母國ぞ”と

叫^{たまに}ばぬほどに靈魂^{たまに}の
死に果てしもの世にありや。
若しありもせば、熟^{じく}と見よ。
彼よりこばす歌もなく、
高き位も名聲も、
思ふがまゝに富わりとも、
位階、金、権ありながら、
我利々々亡者、卑劣漢、
美名はかなき、虚名にて
二重に死にて塵の身は
賤しき、塵に還るのみ。
泣かれ、廢められ、歌はれず。

ローレンス・バイロン

Lord Byron

(一にハハ)

セナケエリブ潰滅

The Destruction of Sennacherib

羊欄^{やらん}襲^{せう}ふ狼のごと・アツシリ
ア人^{じん}殺^{ころ}到^{いた}す。

その軍兵は紫に、又金色^{きんいろ}にき
らめきつ。

槍の穂の輝きは、さながら
深きガリラヤの

夜ごと渦巻く蒼浪に輝る星

22 影の如くなり。

また軍勢の翳したる旗幟物
は夕陽に

眞實の森の濃緑の木の葉の
ごとく見えにしが、

その軍勢は翌日^{あくるひ}を待たで脱
くも秋風の

すすべる森の樹々の葉のご
とくに萎えて散り敷^ふきぬ。

死の天使^{てんし}や風を馳^はり、強き
翼を羽^はばたきて

飛び過ぐなべに仇人^{かいて}の面に
息を吹きしがばー

眠れるもの、眼は霞み、死
人となりて冷えはてつ、
また心臓は只た一度、波打
ち永久に静まりぬ。

かくて軍馬は鼻の穴廣く開
きて横はり、
誇りかなりしその息は今や
通はずなりはてつ、
喘ぎし時の口の泡芝生に白
くかゝれるは、
巖を噛みて寄す波の飛沫の
如く冷たかり。

そこには騎手も痙攣^{ひきつ}りて、
色青がめて横はり、
額に野邊の露しるく、鎧に
錆のあらはにて、
絶えて音なき幕屋には、旗
のみひとり翻^{ひら}へりー
長柄の槍はのけざまに、刺
叭は今や吹き手なし。

かくてアシエアの寡婦^{やもめ}らは
悲鳴を上げて泣き叫び、
バールの宮の偶像は、打ち
碎かれぬことごとく、
大刀の一撃逃れたる、あは

れ免のつはものは

萬軍の主の一瞥に、淡雪の
こと消え失せぬ。

註、列王記卷下、八一九参照

ギリシヤの嶋々 (ドンゲョシ)
The Isles of Greece (From Don Juan)

ギリシヤの嶋よ、嶋々よ、

燃ゆるザッオー戀ひ歌ひ、

和と戦術の學興り、

デロス・³フーバス現れし處、

常夏の色輝やけど

24 陽たゞ空高く照すのみ。

⁴シオと⁵テオスの詩人の

雄々し堅琴、戀の琵琶、

榮ある樂はうとまれつ、

故郷の岸やはらかにも、

西の洋なる蓬萊に

去りて渚は聲もなし。

山脈マラソンに打ち聞け、

マラソン、海に臨むところ、

ひとり静かに佇ずめば、

自由ギリシヤを尚ほ夢む！

ペルシヤ人の古墳に立てば

我を奴隸と思ひ得ん。

神讀くしき堅琴も

何處にありや、祖國よ汝も
何處にありや、荒磯べに
勇ましの歌音を絶えぬ
勇士の胸は今鼓たず、

王、サラミスを見はるがす
その巖頭に坐を占めぬ。
國々の兵、千々の船、
ことぐ、彼のものなりき。
旦に數へしその兵船は
日没りし時、そも何處にあ
りし？

賤しき春の手に落ちぬ。

榮は地に墮つ、亡國の
民と育ちし我ながら、

歌うたふさへ屈辱の

思ひに顔のはてるかたよ。

俗人いまや誰がためぞ、

ギリシヤ想へば恥また涙。

勝る恩寵に泣くべきか、

恥ぢて足れりや、祖先等が

血流せし地よ、汝が胸中

スパルタ人を今返せ！

三百人の三人だに、

新たに護らんサーモピレ。

な、ど黙せらるや、黙せらるや？

あ、否、遠き龍音の

如き聲あり、一人だに

汝らが中に起つあらば、

我等來らん、來らんと。

生ける者らぞ臍甲斐なき。

休みなん、休みなん、調を

變へよ

注げなみく、とサミア酒を、

トルコ人らに戦争を委ね、

シオの葡萄の血流さん。

聞け、應々と起ちあがる

バカス信徒の勇み聲！

フヒリの踊はなほあれど、

フヒリの方陣いまいづこ、

二つの中の尊とくも

雄々じき術をなど捨てし？

カドマス文字をいかでかは

奴隸の爲と残さんや！

注げなみく、とサミア酒を、

かゝること又思ふまじ！

醉歌めでたきアナクレオン

ボリクレチスに事へしが、
祖先の君は覇者ながら
同じ國人なりけるを。

18
テヤーソニースの僭王は
自由の勁友なりき。
僭王の名はマルケデス！
かゝる雄君いまありて
その專政を布かしめば
國を統ぶるを得たりけん。

20
注げなみくとサミア酒を、
スリの岩が根、
21
パルガの岸
27
べい、

22
トリスの母が育てけん
勇士の裔の残り居つ、
23
ハーキュリースの血を繼ぎし
たぬ
鹿の時かれてありもせん。

賣り買ひをのみ事とする
フランス王に頼るなかれ
己のが劍と兵士ぞ
まこと我等の望みなる、
トルコの武力、伊の欺瞞
廣き楯をも碎くべし。

注げなみくとサミア酒を、
樹蔭に踊るて女らの、

見よや輝やく黒き瞳を！
 さはね興ずるたをやめの
 乳を舍ますは奴隷かと
 思へば湧くは熱涙よ！

かのスニウムの巖の上に
打ち寄す波と我琴の
囁き聞きつゝ歌ひつゝ
白鳥のごと死ななかな。
我がものならじ奴隷の地
サミアの盃はいを地に投げよ。

註、此の歌はバイロンの長篇詩ドンゲョンの第百三巻の中にある歌で、ギリシヤ独立の爲め一命を捧げたバイロンの熱情を歌つた有名な詩である。

- 1 紀元前七世紀の女詩人
2 早く文化の開けし島の名、3 音楽及び詩
の神アポロのギリシヤ名、4 ホーマーの生
れた島の名、5 詩人アタタレオンの生れた島
6 西方の海にありといはれて居た樂園 *Elysium*
7 *The Bled* の誤訳、7 紀元前四〇〇年ベルシ
ヤ兵を破りし古戦場、8 ベルシヤ王ザキシス
9 ベルシヤ艦隊を破りし所、島の名、
10 レオニダスが三百の兵を以てザキシスの大軍
を防ぎし峻崖、11 サモス島に産する酒
12 有名に葡萄酒の産地、酒の神の名、
13 方陣を編み出した戦術家、
14 シーブスの創立者、文字を教中、
15 5を参照、サモス島の専政者、
16 ギリシヤ北部の港、17 名將の名、
18 トラパトルコの出産地、20 港の名、
21 古ギリシヤの一方、23 神話中の大英雄
24 アケカの南端にある岬。

パーシー・シエー

Percy B. Shelley (一七九三—一八二二)

雲雀に寄す

To a Skylark

やよ、喜びの汝「霊」よ！

汝いかで鳥ならん。

天近きほとりより、

惜みなく氣を吐ける

巧まぬ技のいみじくも妙な

調べ。

なほ高く、いや高く、

火と燃ゆる雲のごと

地の面より飛び翔ちて、

碧空を羽搏ちゆき、

歌いつ、揚り、揚りつ、尚

はかつ歌ふ。

沈みゆく陽の光

金色に射しわたり

夕ばゆる雲の上を

なれはしも浮び駛す、

形体離れし歡喜の天駢ける

こと。

薄紫の夕空は

融する汝と融けあいつ、

譬ふれば日開けたる

青空の星のごと

見るも得ざれど歡いの聲聞

えつゝ。

その鋭さは熾烈なる

星の燈の薄れつも、

白みそめたる曙に

降りそぐ銀箭の

見失ふいつゝなほありと思

はゆるなる。

全地にもみ空にも

なが聲ぞ鳴り響き

霽れわたる夜の空の

一ひらの雲間より

月光流れ一天に漲るがごと。

汝は誰ぞや、誰にかも

肖かよふか知らねども、

虹雲よりの雨粒の

輝やきも、いかで汝が

奇し旋律の白雨と輝やくべ

しや。

似つ。

戀の美歌深窓を漏るゝにも

思ひ焦がるゝ胸の中

密かにも慰さむる

また高殿に居籠れり
高貴き姫君が

知らぬ希望と恐怖とも感ぜ
しむごと。

想の光に包まれて、
隠れ棲む詩人の
自づと歌ふ聖歌、

世人らを目覺めしめ

重き翼の盗人をむせばしむ
ごと。

あるは已れの緑葉に
霞はれし花いばら、
温風に散るなべに

あるは露けき谷間の
野花咲き草茂る
おどろの中に遮ぎられ、
かくれつゝ夢のごと
淡き光を放つる黄金の螢。

きらめける草に降る

春雨の音にまさり、

雨に目ざめし草花の

樂しさに、明るさに

又すがしさに、汝が音楽は

優りていみじ。

『精』にもあれ、鳥にまれ

旨し思想語れかし。

戀と酒との讃歌も

われいまだ斯くばかり

歡喜溢るゝ神韻を聞きしこ

となし。

妹背を哭々祝歌も、

凱旋の奏樂も、

汝がそれに比ぶれば

空虚なる響かな。

なほ満たされぬ或物の潜め

るものを。

汝が樂しき音節の

泉そも誰がためぞ？

野邊か波間か、山々か、

いづくの地、また空ぞ、

家族戀いてか、憂さ知らぬ

無垢の姿よ。

汝^{ふれ}の明^あ敏^かるき喜^{よろこ}びに
 倦^お怠^ろのあるべしや
 煩^{わづ}累^{らい}の影^{かげ}だにも
 汝^{ふれ}にまた近^ぢづくがし
 戀^{こひ}すれど、その飽^あ満^{まん}りし悲^{かな}
 哀^{あは}み知らず。

目^め覺^{ざめ}にも睡^ね眠^{むり}にも
 夢^{ゆめ}にだに人^{ひと}しらぬ
 いや眞^{まこと}實^{じつ}にも、いや深^{ふか}き
 死^しの实^{じつ}相^あ知^ちりぬらん
 さなくは歌^{うた}曲^{きょく}の滾^う々と逆^{さか}し
 るべき。

我等^{われら}は狐^{きつね}疑^ぎし、遂^{つい}巡^{めぐ}し
 影^{かげ}を追^おひ喘^{うづ}ぐなり
 眞^{まこと}心^{こころ}よりの笑^{わら}ひさへ
 痛^{いた}ましと子^こみたり
 美^うし歌^{うた}こそ哀^{あは}愁^しの極^{きよく}みを語^{かた}
 れ。

われらもし憎^{にく}、慢^{まん}、懼^{おそ}
 蔑^{あは}しみしならんには
 また我^{われ}等^ら涙^{なみだ}せぬ
 ものと生^あれぬしならば
 汝^{ふれ}が喜^{よろこ}びに近^ぢづくを如^{ごと}何^にで
 得^えつべき。

ありとある樂し音の
調にもいや勝り、
ありとあら書に秘む
寶にもいや勝り、
汝が技くすし！汝こそは地
の嘲笑者。

教へよかれが歡喜びの
半だに知るも得て
その狂はしの諧調の
わが唇や流れなば、
世は我に耳傾けん！今の我
がごと。

ジョン・キーツ

John Keats

(一七九五—一八二一)

無慈悲姫

La Belle Dame sans Merci

何に惱みておゝ、騎士よ！
ひとり蒼ざめ佇むぞ！
湖^{ミヅ}辺の管も枯れはてつ、
鳥も啼かぬに。

何に惱みておゝ、騎士よ！

かくは宴やれて悲しむぞ？
 収と獲りをほり木も鼠ねの
 倉も充てるに。

君めがが額ぬかには、汗ばみて
 苦悶くもんに濡れし百合の花

君めがが頬ほには色褪しせて
 凋しむばら見ゆ。

野路のろに逢あひたるたをめや文ふみは、
 妖女あやめの娘むすめいと美はしく
 髪かみながくと足あし軽かろく、
 燃もゆる眼め持ちぬ。

花冠けっかん、腕うでの輪りん、花はなの帯おビ、
 造つくりて女をに捧たてぐれば、
 戀こひの目めなざし我われに向むかひ
 吐はき息いきもらしぬ。

姫ひめ乗のりせ馬うまは跑だ走し足あしに
 馳はせぬ日ひねもす何なんも見みず。
 斜しやす屈かみなる夢ゆめ心地こころ

姫ひめは歌うたひぬ。

甘あまきもの、根ね、野蜂のちゅう蜜みつ、
 甘露あまのつゆ蜜みつなど採とり来きり、
 妖あやし言葉ことばいへるやう、
 戀こひしの君きみよ。

誘はれたる魔の洞に

泣き伏し歎きたをやめの

狂亂の眼を掩いて

接吻けぬ四つ。

姫は眠りに吾を誘ひ

我は夢みぬあゝ禍日！

寒き丘邊にわが見しは

最後のゆめ。

見しは、こぞりて死と蒼き

王等、王子等、武士等。

彼等叫びぬ無慈悲姫

汝を束縛りぬと。

餓えし唇みな、あんぐりと

薄闇に開け警告めぬ。

かくて冷たき丘のべに

われは目覺めぬ。

さればぞ、こゝに我ひとり

かくは佇ずむ、蒼ざめて、

湖べの管は枯れはてつ

鳥も啼かねど。

ハインリヒ・ハイネ

Heinrich Heine

(一七九
五
九
六
九)

汝こそ花の姿かな

Du bist wie eine Blume.

汝こそ花の姿かな。

愛たく、美しく、又清く。

うち見るたびに言ひしれぬ

憧憬胸に忍び入る。

わが手を君がみ頭に

重ねしづかに祈らまし。

神を常に美しく
愛たく、清く守りねと。

ヘンリー・W・ロングフェロー

Henry W. Longfellow

(一八〇
七
二
九
六
九)

心せよ

Beware

(杜逸の詩より)

一
緑綴よくともて女子に

氣ゆるしそ、

嘘も真実もまくなれば、

心せよ、心せよ、

ゆめな信じそ、

たゞからかつて居るばかり。

二

優しき茶色の眼は持つも、

氣ゆるしそ、

秋波使ふもうつむくも、

心せよ、心せよ、

ゆめな信じそ、

たゞからかつて居るばかり。

三

黄金色なす髪持つも、

氣ゆるしそ、

言葉に眞実あらじかし、

心せよ、心せよ、

ゆめな信じそ、

たゞからかつて居るばかり。

四

雪をあざむく柔胸に、

氣ゆるしそ、

ちらと見するも皆手管、

心せよ、心せよ、

ゆめな信じそ、

たゞからかつて居るばかり。

五

愛たき花輪贈るとも、

氣ゆるしそ、

君に冠よとの馬鹿頭巾、

心せよ、心せよ、

ゆめな信じそ、
たゞからかつて居らばかり。

歌
Song

空へ放った一つの矢は
落ちてわがなくなりけり、
弓弦はなれし矢はさつと、
目にもとまらず飛びしかば。

空へ歌ったわが歌は
落ちてわがなくなりけり。

39 いかに鋭き眼なりとも

歌の行衛を見まはめん。

時經てとある櫓の木に
かの矢はありぬ折れもせで、
かかくわが歌もあり友に
全^たく暗^{くら}誦^もじられてゐた。

ダンテ G ロゼチ
Dante G. Rossetti (一ハニハニ)

小曲
Sonnet

(生命の家より)
(From The House of Life)

小曲はげに瞬間の記念塔
靈の久遠ゆ去り逝きし不死
の刹那に

捧ぐなる形見の碑文。言ひ
つべし

淨式にもあれ、恐ろしき凶
事にまれ、

敬虔しく真心こめし刻苦の

詩。
畫また夜の治らすなべ象牙

烏木に

彫るもよし、かくて時經は

その花の

40 冠、阿古屋の球つゞり輝や

きてんを。
小曲は貨幣かや、面靈を
見せ

裏は如何なる権威者に屬く
かを示す。

また生の嚴の願いの手向も
の、

さなくば戀の高貴なる從者

の賜物、

又暗き真洞の風の埤頭に

シヤロンの掌に拂ふ三途の

解錢。

註 シヤロンは苗糸の川スケシリスに於て死
者の靈を渡す渡守の名。

作者不詳

Anonymous

おゝなどて人の心は高ぶれ
る？

Oh, why should the Spirit of Mortal be so proud?

おゝなどて人の心は高ぶれ
る？

疾く馳くゝ流星、急ぎ飛ぶ

雲か、

電光の閃き、波の一と片か、

生命より墓の憩ひに人ぞ行く。

枯れ萎び、老櫟の葉も柳葉も、
散りくゝに或は續りつ、いや
はては、

老樹、若樹、高き、低きもこ
きまぜて、

塵と朽ち、横ちらん諸共に。

たらちねの愛で育みし嬰兒も、
嬰兒の慕ひ懷きしその母も、
母と兒が頼り事へし主人さへ、
悉く休息の宿に去り行けり。

て女子の頬と額と目ざしに
輝きし美と樂しさの榮いづ
こ、
そを戀ひし若者どもの記憶
さへ
世の人の心よりとく消え失
せぬ。

帝笏を握りし王の掌
僧冠を着けし聖僧の頭さへ
賢者の眼、勇士の膽もおし
なべて

奥津城の深みに今は隠りぬ

ら。

己のが田に蒔きては刈りし
彼の農夫、
山羊ともに崖を攀ぢたし牧
場守、
日々の糧乞ひ歩きたる乞食
も、
わが踏める草のごと皆萎え
はてぬ。

天と語りし樂しみし彼の牧
師、
赦されぬ罪を犯せし罪人も
智者と愚者、悪と正義のけ

ぢめなく、
その骨は全く混りぬ塵とな
り。

功績を他に譲るべく人々は
花のごとく、草のごとくに萎
えはてつ。

幾度か繰り返されし話をば
真似るべくまた我が前に來
るなり。

祖先等がありしが如く我等
あり。

43 祖先等が見しその光景我等

見る、
飲む流れ、憩ふ木影も異か
らず。
かくて駛す、彼等が駛せし
その道を。

祖先等が耽りし思想我にあ
り、
同じ死の恐怖に我等脅ゆな
り。

我等亦生命に蹴き継れども、
時は疾く翅の鳥と駈り來ん。

戀人の蜜語傳ふる由もなく、

44 かく希望、絶望、快樂、苦

嘲罵^{あざけ}りし傲頑^{あうがん}の胸^{むね}今冷^{ひや}やし。
悲^{かな}しみの聲^{こゑ}も陰府^{いんぷ}より歸^{かへ}り
來^きず。
喜^{よろこ}びの舌^{した}も鎖^{くわ}しぬ啞^おのごと。
人は死^しす、されど我等^{われら}は今^{いま}
のみ思^{おも}ふ。
骨^{こつ}埋^{うめ}めし芝生^{しばせい}を人は歩^あみつ
住^すみ替^かり假^{かり}の住居^{すまゐ}を營^{かま}めど、
世^よの旅^{たび}にあり古^{ふる}ることに皆^{みな}
出會^{であ}ふ。

痛^{いた}を
こき混^ません、我等^{われら}晴雨^{はるふ}の別^{わか}
ちなく、
かくて笑^{わら}み、淚^{なみだ}壽歌^{じうか}、葬歌^{そうか}、
疊^{かさね}み來^きる波^{なみだ}と乱^{みだ}れて押^おし寄^よ
せん。

生^{せい}はげに一瞬^{ひととき}、息^{いき}の一呼^{ひと}吸^そ、
健康^{けんかう}の若^{わか}さより死^しの暗闇^{あんあん}へ、
金色^{こんじき}の客間^{きやくかん}より棺^{くわん}へ袈衣^{けあ}着^き
けて、
おゝ、などて人^{ひと}の心^{こころ}は高^{たか}ぶ
れる？

昭和二十年二月十五日印刷

著者 倭州ハート山收容所 ニ・七・D 常石 寛見
2-7-D Heart Mountain, R.C., Wyoming

發行所 同上

印刷所 格州傳馬市「デuplicator・サプライ」會社
Duplicator Supply Company, Denver, Colorado

